

1. 北方説（アルタイ語族説）

アルタイ語族は次のような語族を言う。かつてはウラル語族（ハンガリーやフィンランドの語族）と一括してウラルアルタイ語族とされ、日本でも戦前の説ではウラルアルタイ語としているものが多いが、現在では両者は分けて考えられている。

アルタイ語族 { トルコ（チュルク）語族…ウズベク語・カザフ語・タタール語など
 { モンゴル語族…ハルハ方言・ブリヤート方言などを含む
 { ツングース語族 …満州語など

フィンランドの言語学者ラムステット（Gustaf John Ramstedt, 1873 – 1950 年、アルタイ比較言語学の権威。フィンランドの初代駐日公使を務めた）は、「今から四千年ほど前にはアルタイ共通祖語というものがある、それから分かれて先トルコ語とモンゴル・ツングース共通祖語が生まれ、前者から多くのトルコ系諸方言が派生し、後者から原始モンゴル語と原始ツングース語が生まれた」としている。

今日、日本語や朝鮮語をアルタイ系語族に含める見解には批判が提起されているが、明治以来の日本語系統論は、ヨーロッパ言語学の影響下で、日本語は（ウラル）アルタイ系の言語であろうという考え方が支配的であった。

ヨーロッパの学者はかなり古くから日本語がウラル・アルタイ語族と系統上の関係をもつと唱えていた。ウィンクラー『ウラル・アルタイ語族、フィン語と日本語』（1909 年）は単に一般的構造上の類似を問題としているだけでなく、語彙の比較にまで及んでいる。

藤岡勝二（言語学者。1872 年～1935 年（明治 5 年～昭和 10 年）。ドイツに留学、帰国後東京帝国大学助教授、教授となる）は「日本語の位置」という講演の中で、ウラル・アルタイ語族の諸言語の特徴として次の十四条をあげ、日本語はこの語族との親族関係を仮定すべきであることを説いた。

- (1) 子音が語頭に二つくることをきらう。
- (2) 語頭に r 音がたたない。
- (3) 母音調和。
- (4) 冠詞がない。
- (5) 文法的性がない。
- (6) 動詞の変化が膠着法による。
- (7) 動詞につく接尾辞・語尾がかなり多い。
- (8) 代名詞の変化が印欧語と異なる。日本語ではテニヲハの接尾によって変化する。
- (9) 一前置詞の代わりに後置詞が用いられる。
- (10) 「持つ」の代わりに「……に……が有る」の形が用いられる。
- (11) 形容詞の比較は奪格を示すテニヲハ（日本語では「ヨリ」）が用いられる。
- (12) 疑問文では文末に疑問詞（日本語では「カ」）が用いられる。
- (13) 接続詞があまり用いられない。
- (14) 語の順序において、修飾語は被修飾語の前に立ち、目的語が動詞の前に立つ。

ウラル・アルタイ語族の言語の特徴については、すでに 1838 年（天保 9 年）にエストニアのウィーデマン（Wiedeman）が 14 項目を指摘しており、藤岡の指摘した項目のうち（1）（2）（8）以外はウィーデマンのものである。

新村出（京都帝国大学教授、1876 – 1967）もウラル・アルタイ説を採った。「国語の根本関係はおのづから南方よりはむしろ北方に傾いてゐるやうに思はれる。事実、今日国語が朝鮮語と共にウラル

・アルタイ語に帰属すべきことについては、見透としては誰も疑ふものはないであらう」（新村出「国語系統論」「国語科学講座」1935年）

藤岡は類型学的特徴を指摘するに止まったが、新村は、個々の文法的事項について、日本語とウラル・アルタイ諸語との比較にまで進んだ。新村は日本語の複数接尾辞タチ(-tati)を朝鮮語の(-tol)、モルドビン語(-t)、ウォグール語(-t)、オスチヤーク語(-tl)などと比較し、さらにトルコ語の(-lar)、ツングース語の(-sal,-hal)などとさえ比較している。また、日本語の主格につく「は」についても満州語・蒙古語・ウラル諸語との比較を行なった。しかし比較言語学から言えば、諸言語間の音韻対応も明らかにされておらず、確実なものとはいえない。

小倉進平（東京帝国大学言語学科主任教授）も、ウラル・アルタイ語族の諸特徴（母音調和、子音法則、頭音及び末音規則、特殊な文の構造法）をあげ、「国語及び朝鮮語は…畢竟ウラルーアルタイ語族の一員でなければならぬであらう」（小倉『国語及び朝鮮語のため』1920）と述べ、また、「私の考へる所では、朝鮮語は日本語よりもウラル・アルタイ諸語に対し一層緊密なる関係を有し、多くの同源の語を含むが如く思はれるが、日本語・朝鮮語を包含せる一体とウラル・アルタイ諸語との間にその法則を求めることはやや困難の状態にあると思ふ」（小倉「朝鮮語と日本語」『国語科学講座』1939）とも述べる。日本語はウラル・アルタイ的と考えられるが、朝鮮語はいつそう、そう考えられるという。

金田一京助は『国語史系統編』（1932年）で、アルタイ語族説の立場をとったが、積極的な主張ではなく、次のことばでわかるように条件的のものである。「我々が今国語の親近を八方に物色して、アルタイ語族に擬したのも、世界言語の中に比較的一等近いのは、ここであり、何れかに系統を曳くとしたら、ここが最も可能性の豊かなものだといふことをその文法的、一般的類似と音韻上の特性から考定したといふに止るのである。……」。

2. 朝鮮語との系統関係

明治の初めごろ、東京の英国公使館の日本語書記官補佐をしていたアストンは「日鮮両語比較研究」（『英国アジア協会誌』1879年）を發表、音韻、言語構造上の特徴、数詞・代名詞などの比較を行ない、また約百の共通単語から音対応法則を考えようとした。同系の証明というには遠いが、研究の先駆をなした。

アストンの考えは金沢庄三郎によって受け継がれた。金沢はアストンより約30年後、『日韓両国語同系論』（The Common Origin of the Japanese and Korean Languages 1910年）の中で、アストンより詳しく文法・語彙の比較を行なっているが、その初めの部分に次のように述べている。

「韓国の言語は、我大日本帝国の言語と同一の系統に属せるものにして、我国語の一分派たるに過ぎざることあたかも琉球方言の我国語におけると同様の関係にあるものとす。類例を他に求めば、等しくチュートン語族に属せるドイツ語とオランダ語、ローマン語族中のフランス語とスペイン語との如き、両々語脈を同じうせるものと相似たり」。つまり、朝鮮語は日本語の一分枝である（It is in fact a branch of Japanese）と主張した。

この時期、韓国は日本に併合され植民地となっており、金沢の論はこの時代背景を背景としたものであった。金沢の論に対して、白鳥庫吉や国語学者の山田孝雄らは猛然と反対したが、新村出は「日鮮両語の親縁関係は今ではけっして簡単に確証もできなければ否定し去るのも誤りであろうと思う」（1935年）と述べ、どちらかと言えば金沢に肩を持つ見解を述べている。

金沢をはじめ「日韓語同系論」の立場は、文法的に「ウラル・アルタイ語族」に含められるということの他には、いくつかの同系を感じさせる単語を並べてみせるというもので、金沢が挙げた実例は150個に過ぎず、例えば、日本語の「涙」を朝鮮語の「目(mum)+水(mur)」に由来するというふうな不自然なものが含められ、比較言語学の「音韻対応の法則」には遠かった。

白鳥庫吉・宮崎道三郎らも日・鮮語彙比較においてすぐれた業績を示した。白鳥ははじめ、日・鮮語同系を考えていたが、後にこの考えを捨てたことは次のことばに表われている。「余輩も、嘗て此両国語の間には、必ず緊密の関係あるべしと信ぜしが故に、多年二語の比較研究に従事し、以って一般の期待を満足せしむる程の結果を収めんと務めたりき。然るに、事實は予想と相反し、研究の歩武を進むるに従って、益々両語の関係疎遠にして、当初の期待したるが如き親密のものにあらざるを感ずるに至れり」（白鳥『日本語の系統』）。

朝鮮語と日本語との関係を、厳密な音対応（母音及び子音の対応）に基づいて明らかにしようと試みたものは、近代的蒙古学、比較アルタイ言語学の創始者ラムステットである。「朝鮮及び日本の二単語に就て」（『民族』1926年）の中で、「島」を表わす日本語シマと朝鮮語 syem、「船」を表わすという日本語へ（へサキのへ。ラムステットはへ・サキを「舟・先」と解する。しかしこれは誤り。「へ」はもともと「船首」をさすことばである）と朝鮮語 pai を比較した。

ラムステットは日鮮語の同系を断定しなかった。その『アルタイ言語学概論』1957年）の中で、朝鮮語をアルタイ系言語の中に入れていたが、日本語をその中に入れることを控えている。

戦後では、大野晋が日鮮両語の同系を説いた。『日本語の起源』（1957年）の中で、従来の研究者たちより多くの語彙比較例をあげている（アストンは、重複するものも加えて約百例、金沢は百五十例、大野は重複をも加えて約二百七十例）。これらを「音則」に従って、整理しようとしている点は評価されるものの、音と意味の類似が恣意的でないとはいえず不確実な点が多い。大野説は単なる日鮮語同系説ではなく、南方的な基層言語の上に朝鮮など北方系の言語が重なったものと捉えていた。

「日本には縄文式時代に、ポリネシア語族のような音韻組織を持った南方系の言語が行われていた。弥生式文化の伝来とともに、アルタイ語的な文法体系と母音調和とを持った朝鮮南部の言語が行われるようになり、それは北九州から、南へ、東へと広まり、第一次的には近畿地方までをその言語区域としたであろう」（『日本語の起源』108-109 ページ）。「ただ、朝鮮からの言語の伝来は、圧倒的多数の人間の渡来を伴ってはいなかったために、それまでの言語の文法体系を変えることはできたけれども、語彙のいくつかは、変えずに残した」（199 ページ）。

服部四郎（東京大学教授）も、日鮮両語の親族関係の存在を断定はしないが、その蓋然性を認め、「われわれの知る範囲では、なんといっても朝鮮語、さらにアルタイ諸言語が、日本語と親族関係を有する蓋然性がいちばん大きい」と述べ（服部『日本語の系統』94 頁）、また「現在のところ〔日本語と〕最も近い関係に立つかと考えられる朝鮮語」云々（『同』229 頁）とも述べているところから、朝鮮語との親族関係の蓋然性が最も重くみられていることは明らかである。しかし、それはあくまで仮説であり、かりに日・鮮語が共通祖語から分裂したとしても、今から四千年まえ以後に分裂したものではありませんという結論が出される（229 頁）。服部が日本語をアルタイ諸言語の中で特に朝鮮語と近い関係をもつとみる理由は、いわゆる基礎語彙において両言語に共通語らしいものが他のアルタイ系言語よりも多く見いだされること、いくつかの音対応法則が見いだされることにあるようである。

朝鮮語とアルタイ諸語との関係が、ラムステットの『朝鮮語源辞典』（1949年）、『アルタイ言語学概論 I』（1957年）、『同』II（1952年）等によってやや明らかになりつつあり、今後の比較研究がまたれている。

3. 南方説

日本語が南方語と近い関係にあるとする説は、明治時代の中頃の『日本アジア協会報』（横浜の居留外国人による会）に現れている。オランダの学者ラベルトン「オセアニック諸語、および日本・マレー・ポリネシア語族の分枝としての日本語」（1925年）、ワイマント「日本語及び日本人のオセアニア起源説」（1926年）などである。

松本信広は、『日本語とオーストロアジア諸語』（パリ 1928年）の中で、日本語と南方諸語とを113語について比較した。しかし、文法体系の大きな相違が説明されていないのと音韻比較が厳密でなく、成功したとは見られていない。

泉井久之助は「日本語と南島諸語一系譜関係か、寄与の関係か」という論文を『民族学研究』誌（1952年）に発表した。この論文の中で泉井は、オーストロネシア（マレー・ポリネシア）諸語が日本語とは系統上異なるけれども、日本語の語彙形成に寄与していることを証明しようとしている。

泉井は、南島諸語の語構成、共通態（各語形の出発点となったと推定される形）を設定し、マレー・ポリネシア語と日本語との間に母音および子音の一連の対応を見いだそうとした。しかし、泉井の比較は、全体として比較例があまりに少なすぎ、確実な対応と思われるものは多くはないであろうとされる。しかし、とにかく南方諸語の研究が無方法論的に行なわれがちであったのに対し、このような研究が行なわれはじめたことは注目される。泉井は、南島語は日本語におけるサブストレータム（基層言語）を形成しているかと捉えていた。

「日本語と南島語は同系の言語ではない。日本語を構成すべく、その文法形態を携えてこの島に来た言語は、もともと大陸にあったものと思われる。むしろ、将来いわゆるこの日本語たべくあった言語、日本語のはじめは、むしろ大陸の、しかも相当奥地において形成せられたにちがいない。それがこの島に来たとき、そこには主として西南日本より、そして恐らくは朝鮮南部にわたって「南島系の言語が行われていたものと思われる。私はこれに関して、別に遠くフィノ・ウグール諸語との比較によって、日本語の主流となった要素のウラル系（あるいはより少なくアルタイ系）であったことを証明せんとしたことがある。何れにせよこの場合、古い言語〔南島系の言語〕は新しく来た言語〔フィノ・ウグール系の言語〕によって置き換えられたけれども、その語彙要素〔すなわち南島系言語の語彙要素〕の若干は、新しいもの〔すなわちフィノ・ウグール系言語〕の中に吸収せられたであろう」（25、26頁）。

この点は、南島の要素を借用語とみなしていた新村出や服部四郎の見解とは異なる。

新村は、「……外来語輸入語として南洋語の存在を予想し、決して同根語と信ずるまでに深い関係が成立ってゐたと思ふのではない」（新村『日本の言葉』9頁）と述べ、また服部四郎は、「アウストロネシア語やアウストロアジア語族からも単語の借用が行われた蓋然性はあるが、これらの諸言語と日本語との親族関係を肯定することは非常に困難であると思う」（服部『日本語の系統』20頁）と述べている。

日本語における南島の要素については、ラベルトン・ワイマントのように同系関係の証明とみる見方があり、泉井・大野のようにサブストレータムとみる見方もあり、新村・服部のように借用的要素とみる見方もある。

泉井説と大野説とは類似しているが、次のような相違点もある。

	サブストレータム	後来言語
泉井説	マレー・ポリネシア系言語	フィンノ・ウグール系言語
大野説	ポリネシア語に類する言語	南朝鮮語

4. アイヌ語

アイヌ語が日本語と全く系統を異にする言語であることについては、チェンバレンが「アイヌ研究より観たる日本の言語・神話及地名」(『文科大学紀要』1887年)で15項目にわたって論じたが、『アイヌ・英・和辞典』(第二版、東京、1926年)の著者バチェラーは、「アイヌ語は文法構造において現代日本語とは大いにちがっているが、古代日本語とアイヌ語とを研究すると多くの起源的親近性が認められる」(辞典)と述べ、その例として45の日本・アイヌ単語を比較している。そこには著者の日本語史および方言に関する知識が不十分であるために生まれた不当な比較も少なくないが、これに基づいて次のような結論が述べられる。

「これらの単語の分析は、今は廃れてしまった古い日本語の或る部分と現代アイヌ語との間の非常に密接な関連を証明している」(18頁)。

バチェラーは日本語がアイヌ語から生まれたとか、あるいは両言語は同一の祖語にさかのぼるとかと考えていたというよりは、アイヌ語を日本語のサブストレータム(基層言語)と考えていたようである。「…古来日本の地に住んで居た或る民族がありました(私の考えでは現在のアイヌ人の祖先)。そこへまた新しくもつと文明を持った民族が移住して来た(私の考えでは現在の日本人)。併し便宜上又勢力なども関係し、其の他其の当時の事情から特に地名などは先住民族と同じ呼び方をして之を用ひて居たものであります」(バチェラー『アイヌ語より観たる日本地名研究』1929年)という彼のことがばからそれが推定される。



■ジョン・バチェラー

金田一京助はアイヌ語と日本語との系統関係を認めず、バチェラーに次のように反駁している。

『若し仮りに百歩を譲って、一々のかういふ単語がよしアイヌ起源であるとした所で、語彙の輸入といふことにはなるが、まだ以て日本語がアイヌ語から出たと為すには文法上の一致を説かなければ不十分である。文法は、アイヌ語は、周囲のアジア民族にちょっと類の無い抱合語、及び一步進んで輯合語の習慣をもち、到底、斯様な学説の成り立つ余地は無いものである』(金田一『国語史系統篇』)。

他方、白鳥庫吉は、「余輩の研究する所によれば、アイヌ語にはウラル・アルタイ語系の原子を多く含有す」(白鳥『日本語の系統』)と述べるが、どういう原子かということについて説明がない。

近くは服部四郎が、アイヌ語と日本語との同系関係の可能性を説いている。「…頭を切りかえて両言語を比較してみると、親族関係に起因すると考え得る類似点がかかなり目に映ってくる。そればかりでなく、アイヌ語と朝鮮語との間にもかなり類似点が見出だされる。とはいえ、日本語と朝鮮語との距離は4700年(最下限)である蓋然性があるが、アイヌ語とこれらの言語との距離はさらに遠く、同系であるとしても、7000余年ないし1万余年であろう。従来、両言語の文法上の大きな差異があり、アイヌ語は抱合的であり、日本語は膠着的であると言われてきたが、フランス語の構造でさえ抱合的と言い得るのであって、言語の構造上の差は長期間のうちには生じ得るから、構造上の差を以て同系の可能性を否定することはできない」と説いた(服部『日本語の系統』)。

アイヌ語、日本語両言語が遠いにせよ、親族関係の蓋然性をもつことはどういう点に表われているのか。「たとえば、アイヌ語に kur 《影》、niskur 《雲》、kunne (→ kur + ne) 《黒い》、ekurok 《黒い》などの単語があり、いずれも語根√kur を含むが、日本語の kurosi (黒)、kurasi (暗)などに含まれる語根√kur に、形も意味も似ている。…スワディシュ(Swadesh)の(言語年代学)語彙を比較しただけでも次のような類似が直ちに目にうつる。

アイヌ語	kap	se-	mat	tek	an	ne-~ na-	poye
(意味)	[皮]	[背]	[女]	[手]	[我]	[何]	[掘]
日本語	kapa	se	me	*tei	a	na-	poru

基礎語彙のこのような類似は、偶然の一致だとか借用関係によるとか言って簡単に片づけて了うわけには行かない。…アイヌ語の文法が、日本語とは親族関係が無いと断定し得るほど、日本語のそれと異なるかというに、そうではない。…アイヌ語には、日本語の『てにをは』にも似た、動詞や名詞に接尾する自立性の弱い形式があり、また語順は両言語において類似している」(服部前掲書)。

チェンバレン (Basil Hann Chamberlain、1850-1935)

英国のベアリング銀行に勤め後、1873 年に来日した。築地の海軍兵学寮の英語教師となり、かたわら日本古典の勉強を始めた。その成果は『日本の古代詩歌』(The Classical Poetry the Japanese,1880)、『英訳古事記』(A Translation of the "Ko-ji-ki," or "Recordu of Ancient Matters,"1882) に集約されている。これらの研究が認められ、1886 年に東京帝国大学の博言学(後の言語学)および日本語学の初代教授となった。日本語・朝鮮語・アイヌ語・琉球語などを研究した。彼の下から、上田万年、芳賀矢一、岡倉由三郎などが出た。アストン、サトウトともに日本学の三大巨人とも称されている。

ジョン・バチェラー (John Batchelor、1854 — 1944 年)

大英帝国本国から派遣された、キリスト教の伝道師。当時ヨーロッパ諸国は、植民地に対する精神的支配のため大量の伝道師・宣教師を送り込んでいた。ジョン・バチェラーは明治 10 年に北海道に入り、熱心にアイヌ語を学び、『アイヌ語辞典』を編纂した他、「讚美歌」や「聖書」をアイヌ語に訳してキリスト教の布教に努めた。

5. その他一奇説と見られているもの

C・K・パーカー(元大阪高等学校教授)は『日本語複合動詞辞典』(A Dictionary of Japanese Compound Verbs, 1939)(邦訳『日本語・西藏・緬甸語同系論』1941年)の序論で、日本語とチベット・ビルマ語の中に共通要素を見いだして、両語が同系であるとした。

他方、チベット・ビルマ語族のチベット・ヒマラヤ・グループに属するレプチャ語と古代日本語との間の密接な関係を説いて注目を集めた著書に、安田徳太郎の「万葉集の謎」(1955)がある。その「まえがき」に安田は次のように述べる。「……とうとう日本語の故郷を掘りあてた。わたくしはヒマラヤの谷底で、万葉時代の日本語を、現にしゃべっている民族につきあたった。それだけではない。かれらはわたくしたちと同じに、アカンとか、ソワソワとか、シドロモドロという言葉までしゃべっていた」。そこでちょうど、コロンブスが新大陸発見からの帰路大西洋で暴風雨に出会ったとき、自分が死んでも彼の発見が消えてしまうことを恐れて、羊皮紙に書きしるし樽に入れて海中に投げたように、「いまころりと死ぬと、せつかくの日本語の起源が、消えてなくなってしまうので、いちおう輪郭だけでも本にして」発行したという。これは主としてマナーリングのレプチャ語辞典によって日本語単語とレプチャ語単語とを比較したもので、安田は、「…数か月のうちに、わたくしたちが 毎日しゃべっている土台の言語が千五百も集まった。このばあい、発音も意味も日本語とほとんど同じであるから、べつにこじつける必要もなかった」(23 頁)という。しかし比較がいかにも無原則であり、したがってナンセンスであるかは次の一例でもわかる。「鳥やけだものをとるワナは、レプチャ語ではパン (pan) であるが、これが日本ではワナ (wana) になった。『妊娠する』はポツ (pot) ポテであるが、これが腹ポテ (bote) になった。刷毛 (ハケ) はパク (pak) であるが、これがハケ (hake) になった。籠はパ・ク (pa-ku)、パ・コであるが、これはカ・コ (ka-ko) になったし、野菜のカブはパム (pam) であるが、これがカブ (kabu) になった。『巻く』は PAP (pap) であるが、これがマク (maku) になった。絵はペ (pe) であるが、これがエ (ve) になったし、家畜の餌はペ (pye) であるが、これもエになった」(安田『万葉集の謎』40 頁)。レプチャの p・p は日本語では w・b・h・k・m になっているという。どういう条件のもとで p や p が w・b・h などになるのか少し

も説明されていないで、ただ断定するばかりである。学問とは断定することではなくて、証明することであるという簡単な事実が全く忘れられているようである。

田口鼎軒は「国語上より観察したる人種の初代」という論文（『古代の研究』1902年所収）の中で、主として、文における語の配列順序や、印欧語にも部分的にみられる膠着的性質に着眼して、サンスクリット・ラテン・ギリシア語の文法は現代の英語やドイツ語よりも、むしろ、日本・朝鮮・トルコ・蒙古・ハンガリア語の文法に近いという説を出した。

星健之介は日本語を印欧系のペルシア語と関係させ、また木村鷹太郎はギリシア語との同系を考えたが、これらの説はもちろん有力となることができなかつた。印欧系言語との同系を主張することは現在ではほとんど不可能となっている。なぜなら、印欧言語学は非常に発達し、とくに1870年代にドイツにおこったいわゆる青年文法学派（Junggrammatiker）の手で比較方法が精密となったばかりでなく、幾多の古代碑文が解読されて古代の状態に関する知識がゆたかになり最近では英国のヴェントリス（本来は建築家）によってミケネ時代のギリシア碑文（紀元前一五—一四世紀のもの）すら解読され、今から三千年以上も前のギリシア語をたどることが可能となり、これによって印欧祖語の姿が以前よりはっきりしているから、印欧言語学の根底をくっがえすほどの大発見をする学者の説でもないかぎり、ただちにその欠陥が暴露されてしまうからである。